

安全・安心な社会づくり

自然災害への対応、健康・医療の増進、情報セキュリティの向上、人間の安全保障などグローバル社会はさまざまな課題を抱えています。ここでは、公共施設間ホットラインシステム、サッカーワールドカップのスタジアムのICTシステムなど、人々が安全・安心に暮らせる社会づくりに貢献している事例をご紹介します。

災害に強い「公共施設間ホットラインシステム」で被災地の情報交換網を確保

岩手県陸前高田市では、東日本大震災時に公衆ネットワークが被災し、通信ケーブルの断絶や極度の回線集中による通信困難などが発生しました。そのため、避難所となった小中学校と他の公共施設との間の通信に大きな影響が出ました。

災害発生時などには、避難者の名簿や手書きの地図、メッセージなど、音声では伝えにくい視覚情報の伝達に、ファクシミリを使ったコミュニケーションは極めて重要です。

NECは、同市の小中学校などの公共施設に、IP告知放送システムと既存のネットワークを組み合わせた災害にも強い「公共施設間ホットラインシステム」を納入しました。これにより、災害時でも地域内の公共施設間で確実に電話やファクシミリを使ったコミュニケーションが行える環境を実現できました。

このシステムは、緊急時に教職員が混乱なく使えるように、平常時にも小中学校間の業務連絡網などとして使用されています。

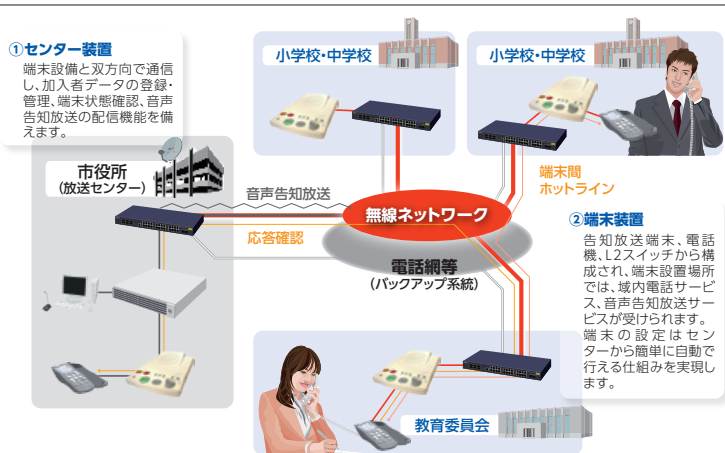


小学校の校舎へのネットワーク機器の据付け工事

一方、全国の自治体は、東日本大震災の経験から、災害時に最も重要な「情報の伝達・共有」手段の強化と再構築に取り組んでいます。特に学校などの公共施設は、児童・生徒、教員、職員の安全確保のみならず、災害時の地域住民の防災拠点や避難所としての役割も担うため、より強固な情報通信インフラを必要としています。

当社は、高度な無線技術や防災情報システムなどのノウハウを活かしながら、今後もこのシステムの普及を推進していきます。また、災害時に避難所となる全国の小中学校に加え、病院、介護施設、公民館、コミュニティセンターなどへもこのシステムを提案していくことで、安全・安心なまちづくりに貢献していきます。

「公共施設間ホットラインシステム」の全体概念図



サッカーのワールドカップブラジル大会会場でもNECの技術が活きる

4年に一度開かれるサッカーのワールドカップは、2014年にブラジル国内の12の会場で開催される予定です。現在、スタジアム建設などの大会準備が急ピッチで進んでおり、NECはこの関連プロジェクトに深く関わっています。

当社は、公式スタジアム12のうち4施設と、準公式スタジアム1施設の計5つのスタジアムのICTシステムを手がけています。

これらのスタジアムは、いずれも先端技術を取り入れた最新鋭の設計で、サステナビリティ(持続可能性)や自然環境保護にも配慮した中南米で有数の施設となります。

ここには、音声やデータなどの通信インフラのほか、大型スクリーン、デジタルサイネージ、セキュリティソリューション、音響システム、ビル管理システムなどを総合的に取り入れています。これらのICTを駆使することにより、観客の安全性・快適性が格段に向上し、女性や子どもを含む家族連れでも安心してサッカーを観戦できるようになります。

また、経済成長の著しい同国では、このワールドカップ開催を機に、スタジアム周辺の地域を起点にした、スマートシティ化構想が進んでいます。この大きなプロジェクトにも当社は深く関わり、ITやネットワークインフラなどを含むスマートサービスを構築し、同国での安全・安心な社会づくりに貢献していきます。



建設中のペルナンブコスタジアム

NECネット安全教室

NECは、1999年に社会貢献活動の一環として「子どもたちが安全・安心にインターネットを利用する」ことを目的とした「NECネット安全教室」をはじめました。これは、子どもたちがネット上での犯罪に巻き込まれることを防止する体験型の啓発教育で、NPO法人イーパーツとの協働により、実施しています。

実際にパソコンを使い、掲示板やチャットなどへの書き込みの体験をとおして、個人情報流出や誹謗・中傷によるネット

上のいじめへの対処のほか、コンピュータウイルス感染や架空請求事例などの疑似体験とその対策についても学べる内容です。

当年度は全国で9回実施し、計417名の子どもたちが参加しました(累計実施回数約200回、累計参加者数約25,000名)。

